

二十世紀思想史としての昭和思想史

植村 和秀

はじめに

昭和思想史は、二十世紀思想史の一例として把握できるのではないか。すなわち、ヨーロッパと日本、アメリカとロシアの二十世紀は、共通の思想的空間として把握しうるのではないか、というのが、本報告の立場である。この立場は、京都学派がいち早く指摘していた世界史的世界の成立を前提とし、二十世紀思想史の日本版が昭和思想史だったのではないか、と結論付ける。そのため、戦前と戦後という時代区分は、二十世紀という時代区分に比べて二義的なものとなり、二十世紀は短く、第一次世界大戦からソ連

滅亡までと区画され、日本版においてはほぼ昭和史に重なることとなる。本報告は要するに、思想史的な時代区分の提案なのである。

ヨーロッパに限定して述べれば、そこでは長い十九世紀、短い二十世紀などの時代区分が提唱されている。長い十九世紀とは、フランス革命から第一次世界大戦までの百二十年以上をもつて十九世紀と呼ぶものであり、短い二十世紀とは、前述の区画の七十年あまりをもつて二十世紀と呼ぶものである。⁽¹⁾もとよりこのような時代区分は、一つの区切り方にすぎず、さまざまな時代区分が常に可能である。しかも思想といふものは、特定の時代や空間を突き抜ける可能性を有してもいる。ただししかし、過去の思想を歴史的に

位置付けたり、思想全般の概括的な変化を把握するためには、時代区分の試みは有用かつ必要であろう。とりわけ現在のように、新しい時代に突入して、歴史的変動期に生きている人間にとっては、なおさらである。

一 日本の短い二十世紀の始まり

さてそれでは、日本の事例はどうのように区切りうるであろうか。短い二十世紀の始まりは、ヨーロッパとロシアにおいては明瞭に、アメリカにおいてもほぼ明瞭に、第一次世界大戦にある。それでは日本においてはどうであろうか。例えばウイーン出身の作家シュテファン・ツヴァイクが、「我々の今日と我々の昨日や一昨日とのあいだのすべての橋は壊されてしまった」と語ったような断絶感は、第一次世界大戦後の日本に転用できるようには思われないのである。

しかしながら、明治期と昭和期を比較すれば、そこに大きな断絶があるのもたしかである。それは例えば、一九〇三年生まれの竹山道雄が、一九四九年に公表した感懷にも現れている。竹山は、「大正の末から昭和のはじめ」に「日本人は大変化をとげた」とし、「むかしからの日本の文化・道徳精神はあのころついに命数がつき、もはや創造的

原理としてはたらくことができなくなってしまった」とする。そして、「日本人の精神は新しい段階に入つて、ただ過剰なエネルギーをもてあましながら、それを有意義に結晶すべきいかなる積極的な目標もなく、前後十年ほどのあいだ、文化において混沌たる無様式の状態を、モラルにおいて乱脈痴呆の状態をつづけた」と回顧するのである。⁽³⁾

竹山は、「戦争があつたから、そのために戦後の頽廃があつたから、と考えられている。しかし、むしろ戦前の頽廃があつたから、それで戦争になつた、ということはできないものであろうか」と問いかけ、「封建的残滓を藏しながら、いびつに近代化して変質した軍が、やはり封建的残滓をもちながら畸形に近代化して乱脈におちいった社会を、支配した」と総括する。「いずれも頽廃していた」とする竹山は、「そこには、封建性のよさも失われ、近代のよさもできあがつてはいなかつた」と反省し、この状態が敗戦後も継続していると批判するのである。

ただししかし、この断絶感を明確に示す画期的な出来事は、日本においては見当たらぬ。明治維新から六十年近くが過ぎ、江戸期のさまざまな伝統が、ついに静かに命脈尽き果てた、ということなのかもしれない。あるいは、一九二五年成立の普通選挙法と治安維持法が画期的であったのか、それとも一九二二年頃の日本共産党結成や一九二三年の関

東大震災が画期的であったのか、明確には述べがたい。それゆえこの問題への問い合わせの方を転じ、短い二十世紀の思想史的な定義から考えていくことにしたい。

二 短い二十世紀の思想史的定義

短い二十世紀の思想史的定義として本報告で主張されるのは、ドイツの憲法学者カール・シュミットが「政治化の時代」と要約した特徴、すなわち、政治的なものが過剰となつてあらゆるものに浸透していく、という特徴である。⁽⁵⁾一八八八年生まれのシュミットは、「政治的なもの」の概念の一九三二年公刊部分において、以下のように同時代を診断している。

これに對して、国家と社会が相互浸透し、従前の国家的な案件が全て社会的なものとなり、逆に、従前の「單に」社会的な案件が全て国家的なものとなるのに応じて、国家的なものと政治的なものを等置することは、不正確となり、また誤解を招くこととなる。
……かくして、従前の「中立的な」諸領域——宗教、文化、教育、経済——は、活動を停止する。ちなみに、ここでの「中立的」とは、非国家的であり、かつ、非政治的であるという意味においてである。重要な事物

諸領域のそのような中立化と脱政治化への論争的な対抗概念として現れるのは、どの事物領域に對しても関心を持たず、潜在的にはあらゆる領域を把握する全面的な国家である。この国家は、国家と社会の同一性をその属性とする。そこではその結果として、あらゆるもののが、少なくとも可能性においては政治的なものなのであり、「政治的なもの」を區別する特有の指標を基礎付けることは、国家に関連付けさせることは、もはやできないのである。⁽⁶⁾

ここでシュミットが指摘しているのは、政治的なものが概念的に、もはや国家に従属せず、むしろ国家や社会のすべてに優位し、それらを定義しなおしている、ということである。しかもまたシュミットは、そのような政治的なものの過剰さが、国家の全面性の帰結であるとも指する。政治の過剰さは、国家の変容と表裏一体の關係にあると把握されるのである。

そしてシュミットは、この同時代診断に自己の課題と処方箋を混ぜ合わせ、偏った主張を展開することとなつた。シュミットは、近代の危機を近代国家の危機、とりわけ國家主権の危機と捉えて、国家主権の再建に尽力する一方、ブルジョワ自由主義を嫌惡して、ソ連やムッソリーニ治下のイタリアに注目する。そして、国家がトータルになると

の診断を、ドイツの国家主権再建という自己の課題に引き付け、トータルさの意味の重心を、全面性よりも全体性の方にかけたのである。「全体國家」という日本語訳は、この⁽⁷⁾ような偏重を的確に反映させたものと評価しうるであろう（次頁の岡式的説明も参照されたい）。

しかし、政治が過剰となり国家が全面化しても、必ずしも、国家が全体化するとは言い切れないはずである。シユミットの思想はともかく、二十世紀の時代区分としては、

トータルな国家はむしろ「全面的な国家」と訳出すべきであろう。なぜなら、国家の実体性や狭義の全体主義へのシユミット的な偏りではなく、ヨーロッパや日本、アメリカやロシアに共通する時代の特徴の方を、重視したいからである。⁽⁸⁾

さてその上で、ここでもう一度問い合わせてみると、

したい。シユミットの思想的な偏りは、二十世紀という時代の思想的な偏りでもあつたのではないか、と。すなわち、国家の全面化が基本的特徴を成しつつも、その中に生きる人間が、国家の全体化へと偏重し、二十世紀という「政治化の時代」を作り出していったのではないか、と。

ところでシユミットによれば、政治的なものの指標とは、友と敵という対立項の強度にあつた。シユミットは、公的な敵との闘争こそが政治的であり、その闘争が実存的

で具体的な現実のものであればあるほど、政治的であると主張した。それゆえ、公敵の判定如何が政治的命運を左右するのであり、実際には、判定者と判定結果を貫徹する主権性とが国家の命運を握ることとなる。政治的なものを国家の手中に收めんとするシユミットは、かくして、全面的となつて透明化しかねない国家を、全体的に成形しなおそうと苦心するのである。

しかし、このシユミットの切所こそは、実は、二十世紀思想史に特徴的な切所であり、政治的なものに引き寄せられた人々が、引き込まれていきやすい思想的難所だったのではないだろうか。政治の過剰さと国家の全面化という二つの波に巻き込まれ、しかも国家を断念できない人間は、ともすれば、国家の全体化へと偏重し、その全体化の内容において対立する相手との強烈な闘争へと駆り立てられてしまつたのではないだろうか。

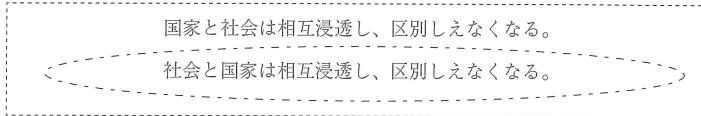
もとより、政治が過剰となり国家が全面化しても、必ずしも、政治が闘争化することは言い切れないはずである。先にも述べたように、国家が全体化するとは言い切れないのと同様にである。ところが実際には、全体国家への志向や公敵との全面的闘争への傾向が、二十世紀の政治には顕著であったように思われる。これは、そのような志向や傾向が、二十世紀を生きた多くの人々のこだわりでもあつたか

補足 シュミットの主張の図式的説明

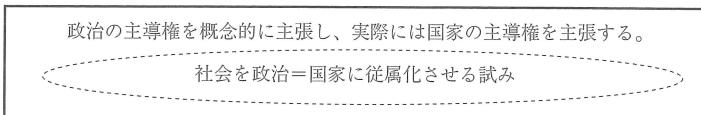
十九世紀の特徴：中立的な国家。国家（＝政治）と社会は区別される。



二十世紀の特徴：トータルな国家。国家と社会は区別しえなくなる。



シュミットの主張：相互浸透して互いに不透明になった国家と社会を、国家と政治の側から再把握せんとする。すなわち、国家主権の再建を課題とし、概念的には政治的なるものを強調し、実際には、全面的な国家を全体的な国家へと変化させて、国家の優位を目指す。



らであろうし、時代の特徴と人間の反応とが相俟つて、思想的な偏りを生じさせ、政治をそのように偏重させたためなのであろう。

二十世紀においては、社会主義がソ連型社会主義へと変質し、それと交錯したナショナリズムがファシズムやナチズムへと変質し、それぞれに難所を乗り越えたと喧伝して、さまざまな人々を思想的に惹きつけた。他方で、個人商店の余韻を残す十九世紀流の近代国家は、とりわけ第一次世界大戦を決定的契機として、国際的な超巨大企業の姿へと変質し、さもなくば滅亡し、あるいは周縁化していく。そして、政治の過剰さと国家の全面化という二つの波は、とりわけロシアにおいて、ソ連という最も典型的な全体国家の形を成し、公敵との闘争を現前させ、この時代の特徴と興亡を体現させたようと思われる。ソ連国家の興亡をもつて二十世紀の区画の指標とするゆえんである。

三 二十世紀思想史としての昭和思想史

そして日本国家の二十世紀は、国家の全面化と政治の過剰さの決定的契機を、どこで区切るかによって定義されることとなる。その意味においては、普通選挙による大衆の政治化促進も、治安維持法による日常生活の政治化も、二

十世紀の始まりに思えるし、日本共産党結成をソ連型社会主義の日本における本格化として、あるいは関東大震災での朝鮮人虐殺や社会主義者虐殺を敵対の加速化として、二十世紀の始まりと考えることもできるであろう。他方、二十世紀の終りは、ソ連末期と重なった昭和時代の終りと象徴的に重複させうるであろうし、高度経済成長期から進行した政治熱の沈静化、国家への関心の希薄化にあつたともみなしうるであろう。いずれにせよ、区切りは漠然とさせたままで、ここでは昭和思想史の事例を瞥見してみることにしたい。

1 丸山眞男と平泉澄の事例

丸山眞男（一九一四—一九九六）と平泉澄（一八九五—一九八四）は、二十世紀を思想的に乗りこなそうとする一面を持つていたのではないだろうか。すなわち、二十世紀の時代的特徴に、主体的に取り組む一面を持っていたのではないか。丸山は、民主主義理念によつて自己の生を規律する人間、丸山からすれば近代国家を真に担つていくことのできる人間の形成に努力した。これに対して平泉は、皇国理念によつて自己の生を規律する人間、平泉からすれば日本国家を真に担つていくことのできる人間の形成に努力した。¹⁹彼らが形成しようとした人間は、政治の過剰さと

国家の全面化という二つの波を自覺的に乗りこなすことのできる人間だったのである。

丸山と平泉は、ともに政治理念による人間の生の規律を求める、結果として、人間の生の政治化を促進し、国家を人間の生の課題とした。そして二人は、ともに自己の理念によつて政治と国家を掌握しなおそとし、しかもその際に重要なことは、彼らの政治理念が正面から対立し、その対立の強度が、実存的で具体的な現実の闘争にまで達するものであったことである。二人はまさに、シユミットの意味における公的な敵なのである。

それではなぜ、二人は公的な敵となるのか。それは畢竟、丸山の民主主義理念が国民主権をその実現への絶対条件とし、平泉の皇国理念が天皇主権をその実現への絶対条件としたからであろう。そして丸山にとって、近代国家は民主主義理念に必要ではあっても、それ以上の独自の価値を有するものではなく、全体國家への偏りは認められない。これに対して平泉は、日本国家を皇国理念と一体のものとし、両者を切り離すことを認めず、全体國家への偏りはきわめて日本のである。ちなみに丸山は、「政治化の時代」のもたらす制約として、非政治的で非国家的な生をやむなく断念し、平泉は日本の本来の可能性を展開させるためとして、そのような生を進んで斥けたのであつた。²⁰

この二人の敵対関係は、二十世紀における政治の闘争化の一例であると同時に、日本の事例での主たる対立軸を明らかにするものではないだろうか。すなわち、國民主権と天皇主権との敵対関係こそは、日本における対立の強度を極度に高め、昭和期における政治の闘争化を強く促進したものではなかつただろうか。丸山と平泉はそれぞれ、この対立軸の一方を強く表現し、それによつて、政治の闘争化という時代の一面を体現したように思われるるのである。⁽¹¹⁾

2 萩田胸喜と西田幾多郎の事例

萩田胸喜（一八九四—一九四六）と西田幾多郎（一八七〇—一九四五）は、二十世紀に思想的に呑み込まれた一面を持つつていたのではないだろうか。すなわち、自己を問うて時代に到達し、時代の特徴を自己に反映する一面を持つていたのではないだろうか。萩田は、公敵の宣告を乱発して対立の強度を最大化し、結果として、政治の過剰さを自己の政治的活動の過剰さとして現出させることとなつた。他方、西田は、人間のあらゆる活動を創造の原理へと集約し、そこから國家と政治の領域に進んで、結果として、国家の全面化に対応しうる全面的な哲学を提示することとなつた。二人はそれぞれに、政治の過剰さや国家の全面化という時代の特徴を、自己に強く反映したように思われるのである。⁽¹²⁾

ただしその際、二人が自覺的に時代を受け止めたとは言い難いように思われる。萩田は、ただ何事もなく流されていくことを欲し、何かを為さんとする一切の言動をその障害とみなし、公敵の宣告と殲滅ばかりを求めて続けた。これに対して西田は、ひたすらに創造へと挑戦し続け、自己の哲学をどこまでも自己流に、政治や国家の領域にまで広げ続けた。しかし、このような萩田の政治的活動や西田の哲学的国家論において、時代を乗りこなすための提案が行なわれたようには思われない。それは、萩田が時代の上に出ることを望み、西田が時代の先に出ることを望んで、丸山や平泉のように、時代の中で時代と取り組もうとしたしかつたからではないだろうか。

政治の過剰さと国家の全面化という二つの波に呑み込まれて、一人は、とにかく泳ぎ続けたのではないか。萩田の活動も西田の哲学も、政治と国家に巻き込まれ、その上や前に出ようと動き続けた、ということではなかつただろうか。萩田と西田には、「日本」への問いはあつても、主権者への問いは見当たらず、政治と国家をどのように掌握しながらしていくかについて、具体的な手がかりを見出すことができない。しかしながら、萩田や西田のような人間までもが、政治的なるものに引き寄せられていつたことに、時代の傾斜が現れているとも言えるであろう。日本を問うて自

己を問い、世界を問わんとする彼らでさえも、政治的なるものに浸潤されて、自己の生きる日本の世界的原理を主張し、そこから政治的な闘争へと参加することになったのである。そしてそのような人々は、昭和戦後期においても多くのあつたのではないだろうか。

おわりに

本報告では、二十世紀に取り組んだ例として、丸山と平泉を紹介し、二十世紀を反映した例として、蓑田と西田を紹介した。彼らを典型例として、昭和期は政治化の時代としては、戦前戦後に継続したものと把握しうるのではないだろうか。時期に応じて、政治思想的な立場の強弱が変わり、個々人の役柄の変化があつたにせよ、この時期の思想の動力ともなり、思想への引力ともなったのは、政治の過剰さと国家の全面化という特徴だったのではないか。そしてそれゆえに、昭和期には多くの人々が政治へと思想的にのめりこみ、日本においても政治の闘争化と国家の全体化への偏りが生じたのではないか。しかもそれは、二十世紀のヨーロッパやアメリカ、ロシアと共に通する特徴だったのではないだろうか。

二十世紀の思想史は政治思想史へと傾斜し、政治思想史

は国家へと傾斜し、そして闘争へと傾斜して、時代の特徴が作り出されていったようと思われる。もとより人間は、ほぼ常に、時代の色を帯びる一面を有し、それは今の時代も同様であろう。本報告の動機は、時代を区切ることによつて、今の時代を理解することにある。本報告は、政治的で思想的な闘争そのものを想像することが、もはや難しくなった時代からの問い合わせ、今の時代は何なのかを分析しようとする途上からの問い合わせなのである。

注

- (1) 短い二十世紀については、エリック・ホブズボーム、河合秀和訳『二十世紀の歴史——極端な時代』上下、三省堂、一九九六年参照。長い二十世紀については葛谷彩『二十世紀ドイツの国際政治思想——文明論・リアリズム・グローバリゼーション』南窓社、二〇〇五年、序章参考照。

- (2) シュテファン・ツヴァイク、原田義人訳『昨日の世界』I、みすず書房、一九七三年、六頁。本稿における訳文は、文脈に即して適宜改めている。また、引用文中の傍点はすべて原著者のものである。

- (3) 竹山道雄「手帖」(一九五〇年初版刊行)、『昭和の精神史』講談社学術文庫、二八七頁。

(4) 同、二九九頁。なお、個人的回想も交えたバランスの良い史論として、村尾次郎『逆巻く大正——戦後体制の原型』日本教文社、一九七六年参照。

(5) シュミットに關しては、特に古賀敬太『シュミット・ルネッサンス——カール・シュミットの概念的思考に即し』風行社、一〇〇七年参照。

(6) Carl Schmitt, *Der Begriff des Politischen. Text von 1932 mit einem Vorwort und drei Corollarien*, Duncker & Humblot, Berlin, 1963, S.24. (C・ノーハム著、田中浩・原田武雄訳『政治的なもの概念』未来社、一九七〇年、一〇頁)。

(7) ノーハムの「全体國家」論に關しては、古賀敬太・佐野誠編『カール・シュミット時事論文集—ヴァイマー

ル・ナチズム期の憲法・政治論議』風行社、一〇〇〇年、第一章。とりわけ宮本盛太郎氏による訳者解説の一一一～一三三頁参照。

(8) メータルの語義をめぐっては、拙稿「翻訳者としての

丸山眞男——ヨーロッパ思想と日本ナショナリズム」『產大法学』第四〇卷第三・四号(一〇〇七年三月)、第一章。および、拙稿「丸山眞男と平泉澄の歴史的位置——二十世紀の日本思想史への交点」『年報日本思想史』第六号(一〇〇七年三月)、一一三頁参照。

(9) 丸山と平泉に関しては、拙著『丸山眞男と平泉澄

昭和期日本の政治主義』柏書房、一〇〇四年、および、前掲拙稿「丸山眞男と平泉澄の歴史的位置」参照。

(10) ちなみに、丸山の思想は国内的なのであって国民的なではない、と筆者は考へてゐる。

(11) ただし、の対立は、「天皇は、日本國の象徴であり日本國民統合の象徴であつて、この地位は、主權の存する日本國民の総意に基く」と云々日本國憲法第一条の規定によつて、徐々にその強度を下げられていつたようと思われる。

(12) 萩田と西田に關しては、拙著『日本』への問い合わせる闘争——京都学派と原理日本社』柏書房、一〇〇七年参照。

付記 本稿は、シンポジウムでの報告原稿を基に、文意を明確にして、補足するための加筆修正を行なつたものである。

(京都産業大学教授)